

宗教のつなぎ方

—— 大本の宗教提携と平和運動をめぐって ——

出口 三平*・清水 巖三郎**

はじめに（永岡 崇）

本稿は、2015年3月29日に行われたワークショップ「宗教のつなぎ方——大本の宗教提携と平和運動をめぐって」（京都大学人文科学研究所共同研究班「日本宗教史像の再構築」と『大本七十年史』研究会の共催）の記録である。

戦後日本において、宗教者・教団の対外的活動はさまざまなかたちで展開されてきたが、宗教間対話と平和運動はその代表的な動きとあってよいだろう。第二次世界大戦の反省に立ち、宗教者相互の協力を通じて平和な国家、平和な世界を構築しようとする思いがその背景にはあると思われる。これらの対外的活動の歴史的意義を考えるうえでは、宗教者たちが何を考え、どのような活動を行っていったのか、戦後史の広い文脈に位置づけながら実証的に明らかにすることが必要になる。また、戦前までの宗教的伝統のなかから、戦後の活動の萌芽となる思想・実践を丁寧に掘り起こし、戦前・戦後の連続性と変化のありようを検証していくことも重要な課題である。

こうした課題を立てるとき、近代日本を代表する新宗教のひとつである大本の歴史は、きわめて有益な視点を提供してくれる。1950年代、大本やその外郭団体である人類愛善会は、世界連邦運動や原水爆禁止運動などの活動を他宗教に先駆けて展開した。また今日にいたるまで、世界の諸宗教との交流を積極的に行っていることでも知られる。

大本の宗教提携や平和運動は、戦後になってはじめて現れたものではなく、教祖（聖師）出口王仁三郎の戦前・戦中期以来の思想と実践を受け継ぐものであるというのが、当事者たちの語るところである。たしかに王仁三郎の著作には反戦・平和思想の要素が色濃く表れているし、

* でぐち さんぺい

** しみず げんざぶろう

戦前の大本が中国の道院やベトナムのカオダイ教などとの交流を試みていたことは、近代宗教史における宗教間対話の重要な事例として注目すべきだろう。

他方、戦後大本の平和運動が、やがて教団内にコンフリクトをもたらしてしまったということにも注意しなければならない。一般的に言って、宗教者の「本分」とは何か、宗教者は「政治」にかかわるべきなのか、さらに突きつめていけば「宗教」とは何であり、「政治」とは何なのか、といった問題についての考えはそれぞれに異なっている。そうした問いに悩み、ぶつかり合いながら宗教者の対外的活動は行われてきたのであり、そうしたコンフリクトの意味もふくめて検証することが求められるのではないだろうか。

今回のワークショップでは、戦後大本の宗教提携や平和運動に当事者としてかかわった出口三平氏、清水巖三郎氏を招き、こうした活動の具体的な展開過程や背景となる宗教思想について語っていただいた（紙幅の都合上、報告のあとの質疑は割愛している）。ただし、上述のとおり、戦後大本の対外的活動をどのように評価するかということについては、当事者間でも見解がわかれているのが現状であり、ここで語られたものは数ある解釈のひとつであるというべきだろう。とはいえ、さまざまな解釈に真摯に向き合うところから、宗教間対話や平和運動の困難さと豊かさの双方を認識することができるのではないだろうか。

なお、当日は梶龍輔氏（駒澤大学大学院）を聞き手として議論を進行し、録音データの再構成は、「日本宗教史像の再構築」班員の水内勇太氏（同志社大学大学院）が担当した。

戦後大本の対外的活動

梶龍輔：駒澤大学の梶龍輔と申します。簡単に自己紹介をさせていただきますと、ぼくは、日本の新宗教について、とくに戦後の布教教化活動やあるいは教学活動といったものについて、どちらかという、教団組織サイドにおける展開過程というものに関心を持っております。今回のワークショップで話題となる宗教提携や平和運動も、戦後の大本の一つの大きな特徴であるという風にいえると思います。本日は大本でご活躍された出口三平先生、清水巖三郎先生に、ご自身の体験を踏まえてお話しいただくという事で、個人的に非常にたのしみしておりました。また近年、新宗教や民衆宗教と呼ばれる宗教の研究において、新しい視点を求められているように感じますが、このワークショップは、学問的なパースペクティブを広げていくということも意識して企画が編まれたのではないかと考えております。

今回、宗教提携と平和運動ということで、まず、宗教提携に関しまして、出口先生にお話をうかがってみたいと思います。そのあとに、平和運動について清水先生にお話をうかがうという形で、基本的には進めていきたいと思います。

戦後、愛善苑という形で大本は活動を再開していくわけですが、そこにおいて、どのような

コンセプトのもとで宗教提携が行われたのか、そしてまた実際にどのような教団と交流があって、どういったことをしていたのか。まずはそういった基本的なところをお話したいと思っています。また、出口王仁三郎が提唱した「万教同根」という考え、すべての宗教はみな根は同じであるというような、そういう思想が宗教提携を支える理念であったと思いますが、その「万教同根」とは、そもそも具体的に何なのか、ということについて、実際に教団にたずさわっておられた出口先生の観点から具体的にお教えいただきたいと思っています。

「愛善苑」にこめた思い

出口三平：出口三平です。昭和48年（1973）から大本教団に関わり、教学部門にいました。昭和55年に始まりました「第三次大本事件」¹⁾の渦中に関わることになり、教団内問題としての「万教同根」や「平和運動」を省みることが多く、かなり屈折した報告になりそうです。

宗際活動や宗教者の平和運動には、戦前から戦後と、なにかの形で大本は関わってきました。根底には出口王仁三郎の思想があります。

戦後、昭和23年に王仁三郎も昇天し、その意を受けて出口宇知麿²⁾、出口栄二³⁾が戦後教団の運動を牽引してゆきます。簡単に図式化すると、出口宇知麿は宗際化活動、出口栄二は反原爆運動などを軸とする平和運動を推進してゆきました。

私は、出口宇知麿の息子の出口和明⁴⁾の著書『大地の母』⁵⁾で大本と出会い、彼の仕事もいろいろ手伝いました。また、出口栄二の義息ともなり、彼の仕事も手伝っていました。出口栄二の還暦記念として講談社から選集⁶⁾が刊行されましたが、永岡さんが論文⁷⁾で使われている栄二と栗原彬⁸⁾の対談など企画し、戦後平和運動時代の栄二の思いも栗原さんに訊いてもらったようなことです。

大本には個性豊かな人たちが集まっていますが、出口家もそうでした。出口宇知麿は謹厳実直、その息子の和明は一見無頼漢的作家風でしたが、いろいろ地道に取材を重ね、ダイナミックに教祖たちや大本の歴史を描いた人でした。栄二は王仁三郎や二代教主⁹⁾に薫陶を受け、理性的かつ情熱的に活動をする人でした。

戦後すぐの愛善苑は宇知麿が委員長になります。大正年間から王仁三郎に仕え、昭和神聖会運動など対外的にも尽力し、名前を「内丸」とも書くように、「うちをまるくおさめる」、調整型でもある方でした。宇知麿の甥になる栄二は、私も同郷の佐賀出身ですが、『葉隠』的というか、秘めた情熱で、ひとりでも不屈に突っ走るようなところがありました。大本の戦後教団史をみていると、初代委員長・宇知麿と昭和33年に総長となった栄二の、一種の性格悲劇的なものも感じてしまいます。

昭和20年の敗戦後、王仁三郎は「愛善苑」という新名称のもとでの新発足を指示しました。

後でふれてゆきますが、彼の宇宙観、神観、人類観などのエッセンスを込めた「人類愛善」「万教同根」などを戦後活動の指針として指示し、昭和23年1月に亡くなるのですが、宇知麿、栄二の両先達がどこまで王仁三郎の思いを消化し、運動化していたのかという思いは——生意気なことを言いますし、それは自分の課題でもあるのですが——そこらはずっと思ってきました。

王仁三郎は、いろいろと評価されていますが、近代知では捉えにくい深さを持ち、大本教団自体が、彼の内的なもの、そこから発する活動性を、なかなかつかみ得なかったということが言えそうです。そういった個人的な思いも含めながら、戦後大本の宗教提携、平和運動を、今回は宇知麿と栄二の時代に絞って触れて行こうと思います。

戦後、王仁三郎は大本という教団名を使いませんでした。これは彼にとっては重要なことだったと思います。王仁三郎没後、愛善苑という名称は一時的なもので、大本が本来だとして、さしたる検討もなく、再び大本という教団名を使うこととなりますが、在天の王仁三郎はどう思っているのか。ちゃんと真面目に考えるだけの重要性はあると思っています。戦後の、またこれからの宗教提携、また平和運動の質を決定してゆくような問題がそこにあるのでは……と勝手ながら思っている次第です。

昭和20年8月15日に敗戦をむかえ、昭和10年12月8日の第二次弾圧から10年目のその日に、綾部で大本事件解決奉告祭が行われます。そのときに宇知麿は「これからは愛善苑で新生する」という王仁三郎の思いを参拝者たちに伝えています。

王仁三郎は、自分の為すことは終え、今後の組織運営などは弟子たちに任せるとの思いもあったでしょうが、自分はさっさと鳥取の吉岡温泉に長期の湯治にでかけます。残された役員連中は、今後の方針を巡って1週間余、喧々たる議論をしたということですが、方針がでない。役員一同が「これ以上意見は出ませんから、聖師様（王仁三郎）にお伺いしていただきたい」と委員長・宇知麿に願うと、宇知麿は「実は聖師様にはお伺いしてあります。聖師様は「万教同根でいけ」とのお答えです」との返事。一同の役員連中は「我、何をかいわんや」と、愛善苑の方針を満場一致で「万教同根」とし、戦後活動が始まってゆきます。

愛善苑の土台にある「人類愛善」思想も、一切の宗教の根っこは同じという「万教同根」も、いわば超宗教的方向への指示だったと、私は思うのですが、なかなかそこまでは受け止められなかったのではと思っています。

「人類愛善」も「万教同根」も、これは非常に実践的な課題です。エコロジカルでスピリチュアルな世界観であり、従来の閉鎖的な教団を超えて、諸宗教が互いに励みしながら、創造主のいのちの世界に開かれてゆこうという方向があり、その動きを愛善苑としてリードせよという王仁三郎の指示だったのではないかと、私は思ってきました。

ところが、大本教団は宇知麿、栄二の活躍もあり、宗教提携、宗教者の平和運動においては、

日本の先頭ランナー的な活動は行ったのですが、どうも途中で失速した観があります。戦後すぐ、昇天前に王仁三郎が指示した「人類愛善」「万教同根」の理解や展開が、教団内部事情も大きく絡んできますが、その根っこが、どうも深まってゆかなかった、中途半端に終わったという恨みを感じます。

「万教同根」とは

戦後すぐの昭和21年には、京都の宗教界の牛耳をとるといったら悪いですけど、結構すごい働きを、宇知磨は先頭を切って行っていました。『大本七十年史』下巻の戦後すぐの箇所にも書かれています¹⁰。よく頑張ったなど、感心します。

例えばお手元の「戦後大本 平和運動関連年譜メモ」の昭和21年の10月12日に、「国際宗教懇談会」に出席という項目があります。西本願寺を会場に、神仏基ほか各宗教代表者や学者、国外の宗教者など、40名余が出席しています。

西の大谷光照、東本願寺や知恩院、真言宗、日蓮宗、天台宗、臨済宗、基督教団、聖交会、天理教、金光教、黒住教、八坂神社、金比羅神社、神智学会、道院紅卍字会、ほか京大からは久松真一や西谷啓治、同志社からは牧野虎次¹¹や有賀鉄太郎¹²など、よく集まったものだと思います。

愛善苑からは宇知磨が出席し基調的な発言も行っています。この「国際宗教懇談会」は、荘野忠徳が中心になってプロモートしていますが、荘野は昭和17年、第二次事件中、保釈出所した王仁三郎を亀岡に訪ね、王仁三郎から万教同根的な思いを聞いていたようで、「私が国際宗教懇談会を催す構想も、翁（出口聖師）の薫陶が影響していた。私は此の会議の青写真をつくり翁に相談した。翁は画期的壮挙であると賛同され、精神的後援者の一人であった」¹³と語っていたようです。

宇知磨が主に担っていった宗教提携の事例をいちいち追うには時間も準備もありませんので、ここでは問題点を話してゆきます。

先ほども言いましたが、昭和21年はじめに愛善苑が組織化され、「人類愛善」「万教同根」の基本線が掲げられます。

「人類愛善」は、これは神観に関わります。宇宙の本質や実在世界は、神の愛善で成り立っているんだという、万物への親愛、楽観、信頼などの思いに満ちた神観、世界観、生命観といえまじょうか。日本古代からの生命観にも通じ、スピリチュアルな世界観に根ざしていますが、そういう考えを王仁三郎は大正10年（1921）の第一次大本事件後に著述を開始した『靈界物語』という根本教典に書き込んでいます。

万物の根底に神が存在するという、とても楽天的な宗教的感覚ですし、自然への畏敬の思い

が籠もった姿勢です。仏教でいったら天台の本覚思想だとか、もっと遡ると、縄文時代以前からの万物に神の霊が宿るといふ、そのような思いにも繋がり、まさに「超宗教」的なつながりの場になってゆくと思います。

閉鎖された宗教ではなく、ひらかれた超宗教への志向は、王仁三郎が指示した「愛善苑」という組織名称にも反映されました。愛善苑は、四角い囲いのなかの「園」ではなく、開かれた草冠の「苑」にせよと指示します。囲いのある「園」ではいけない、宇宙に、超宗教的な神に開かれた「苑」でなくてはと。

いまひとつの「万教同根」ですが、戦後の新発足時点で王仁三郎ははじめて使っています。現在複数の版元から刊行されている『霊界物語』の第6巻23章に、「万教同根」という章題が付いている版もありますが、ちょっと問題です。口述された当初の大正11年はじめでは、「神儒仏耶の同根」という章題でしたし、その後第何版かにおいて「諸教同根」に王仁三郎が校正します。しかし戦後、王仁三郎が「万教同根」を指示したことを受けてか、昭和40年代に『霊界物語』を再刊するとき、章題を「万教同根」と、担当編集者の判断と思いますが、変更しています。王仁三郎没後ですし、『霊界物語』の章題まで勝手に変えるのはどうかなと思います。

しかし「神儒仏耶の同根」から「諸教同根」、そして戦後「万教同根」を唱えることのなかに、王仁三郎の宗教への思いを追うことは出来そうです。最初の「神儒仏耶の同根」では、神道、儒教、仏教、基督教、また回教や道教も挙げられますが、それらの宗教は、王仁三郎の神学では、スサノヲという救世主神の働きで、時代や場所に依じて開かれた宗教であったと位置づけています。さらに王仁三郎自身が、バハイ教（イスラム系）、道院紅卍字会、普天教、カオダイ教などの提携を進めてゆき、「諸教同根」へと展開する。

戦後の新発足段階で「万教同根」を前面においたのは、これは超宗教的世界への実践的なテーゼではないかなと、まだ私見ですが、そう思っています。王仁三郎最後の指示ともいえる「万教同根でいけ」という内実は、これは「神儒仏耶の同根」という説明語や「諸教同根」という解説語ではなく、「すべてが同じ根っこを持っているんだ。その根っこに開かれてゆけ」という、結構遠大な課題提起だったと思うのですが、そんな王仁三郎の思いを、一週間議論したあげく、「万教同根でゆけ」の指示を宇知磨から聞いた当時の役員が、「何をかいわんや」で、「それでいいよ」と、すんなりと受け入れてしまった。その受け入れ方に文句をいうのも大人げないとは思ふものの、ちょっと軽すぎじゃないか……と思うんですね。

先輩たちは一生懸命に取り組んだと思うのですが、しかし後の大本教団が関わっていく宗教提携には、その「軽さ」が引き継がれている印象が拭えません。

戦後、昭和21年の愛善苑発足のころは、王仁三郎もまだ健在で、愛善苑の顧問に牧野虎次同志社大学学長、真溪涙骨中外日報社主が推されています¹⁴⁾。牧野は明治40年ころから王仁

宗教のつなぎ方（出口・清水）

三郎と交流があり、同志社総長という立場でありながら、邪教として弾圧されたところの顧問になる。真溪涙骨も京都宗教界のご意見番的存在で、王仁三郎とは肝胆相照らすものがあったのでしょ。王仁三郎のそれまでの歩みや心身から醸し出され、言語化された「人類愛善」「万教同根」の想いをキャッチし、共感した。宗教だからそうなんですけど、それが決定的なことではなかったかと思ひます。

人類愛善、万教同根という開かれた場として愛善苑が新発足し、従来の教団枠をこえた動きがあったわけですが、時の経過とともに教団枠のなかに立ち戻ってゆく印象です。愛善苑の委員長であった宇知磨は、人間的にも忍耐強く、第二次事件の獄中、6年8ヶ月、正座を崩さなかったという伝説があります。王仁三郎は対極で、自分の一物で遊んだり、仮病をつかったり、エピソード豊かな獄中生活が記録されています。偉そうには言えませんが、戦後教団のなかでも、我慢しまとめるだけでなく、もっとほかの可能性がなかったのかな……と感じることが多い私の宇知磨氏評です。

出口王仁三郎の言語観

話題をすこし変えますが、「宗教のつなぎ方」という今回のメインテーマですが、大正期から一貫して王仁三郎が行った宗教提携の根っこには、彼独特の言語観があると思ひています。宗教提携の歴史的個別事例を挙げてゆく方が、この場ではいいのかもしれませんが、私なりに、王仁三郎の「宗教のつなぎ方」を彼の言語観から少し触れてみたいと思ひます。

王仁三郎の主著である『靈界物語』（全81巻83冊）は、会話体や短歌、長歌で述べられていますが、なかなか整理しにくいものです。

王仁三郎の言葉は、近代の理性的言語や体制補完の定言形でもありません。「～である」「～すべし」とかの言語は、使われてはいても、方便的なことが多いものです。『靈界物語』は、基本は会話態であり、多様な登場者のポリフォニー的表現です。また、古今の学者・文学者の言葉を、剽窃といわれるのも恐れずに、王仁三郎は多用しています。神学の基本用語には、鈴木大拙が訳したスウェーデンボルグの『天界と地獄』からの用語が活用され、王仁三郎オリジナルな言葉はどこにあるんだ……と問う人もできますが、しかし、そのような多様性、多声性を構成演出しながら、それらの根っこにある何かを引き出し、その本質を醸し出すような形で表現がなされてゆきます。

このような王仁三郎の言語使用のやり方は、彼の宗教性、靈性の世界を開くために必要な方法でもあったと思うのですが、現実の宗教組織になると、それだけでは運営できない……ということになってきます。上からの「～である」や「～すべし」という言葉が避けられないし、それが先行しがちにならざるをえません。

問題を整理しますと、愛善苑で戦後新発足した大本は、昭和21年からの宗教提携、その後の平和運動へと活発な活動は行いました。宇知麿、栄二はじめ、当時の指導者、宣信徒たちの活動には敬意を表します。しかし王仁三郎がめざしていた万教同根的な地平や、平和運動においても人類愛善世界への展望を十全に醸し得なかったとの恨みが残りました。

内面的な問題でもあり、一種のこだわりかもしれませんが、私なりの現場にいて、大本の宗教提携、平和運動について考えるときに、宗教提携や世界平和をめざした王仁三郎の言語観、言霊観に立ち戻りたくなるのです。

私は昭和49年から大本本部の教学分野に勤務していましたが、第二次事件前から活躍し、戦後の大本を支えてきた先輩たちと出会う機会も多くありました。敬愛する先輩諸氏ですが、例えば「大本文献の紙魚」ともいわれたKという方がいました。まさに大本文献の生き字引で「『霊界物語』の何処に何が書いてある」など、よく教えて貰いました。しかし、もっと活きた言霊を……と、ないものねだりをK氏には思わざるをえなかったのも事実です。教団の教典ではなく、教団組織のための言語操作ではなく、そこを突破して、人類愛善、万教同根の地平を……との思いですね。なかなか難しいことで、先輩たちに望むものでもないのですが、一事が万事というか、組織内の立場立場の言葉というのか、その言語で各自が行動をしていく、しかしそれが壁となり、そこで限界を迎えていたのではないかと……。

宗教者のネットワーク

歴史事象に戻って話を続けます。

戦後、日本の宗教界は、ほとんどが戦争協力をしていたわけで、一億総懺悔的な雰囲気ですよ。かたや愛善苑は、戦争には荷担せず、殿堂もなにも総て破壊されたものの、新しく再生していったわけで、誇りもあり、勢いもあったわけです。「万教同根じゃ」との王仁三郎の指示で、牧野や真溪などが顧問となり、両顧問の誘いもあって、昭和21年には西本願寺の大谷光照が来苑、知恩院法主、神社宮司ほか、宗教者たちが愛善苑を訪れています¹⁵⁾。

先に触れました「国際宗教懇談会」、そこから「国際宗教同志会」も結成され、各地で愛善苑が主体となって宗教連合会の活動が活発化してゆきます。『大本七十年史』下巻に数頁にわたる記述がありますが¹⁶⁾、昭和22年ころです。まだ多くの宗教者が戦争中の反省もあって、教団宗派を超えての活動を志向していたころです。

宇知麿委員長は昭和21年7月、岡山の金光教、黒住教を訪問し金光教主、黒住教主と会談もし、各地での宗教提携の動きも醸成されています。

王仁三郎の薫陶をうけた荘野や宇知麿により推進された国際宗教懇談会は、現在のWCRP(世界宗教者平和会議)などに繋がることは、再認識してゆきたいと思います。しかしまたここ

で一言言いたくなるのですが、日本を窮地に追い込んだ戦争、それに協力もした反省もあつての宗教提携のパターンは、王仁三郎が大正期以降に行ったの宗教提携のパターンとは違うとの思いがあります。

王仁三郎の宗教提携は、大正10年から口述をはじめた『霊界物語』に記された神観、世界観に基づくものですし、同時に不思議な神縁で動いてゆきます。『霊界物語』の表現では「エスペラントやバハイ教/紅卍字教や普化教も/残らず元津大神の/仕組み給ひし御経綸/そのほか諸々の神教は/この世の末に現はれて/世を立直す為ぞかし/国会開きが始まりて/十二の流れ一時に/……」¹⁷⁾とかになるのですが、戦後も道院・紅卍字会、バハイ教、カオダイ教などとの接点や交流はあるものの、まだこれからという印象です。

たとえば道院・紅卍字会との出会いは、大正12年の関東大震災以降ですが、神秘的な出会いや、『霊界物語』の神話的世界との符合などもあり、いまでも活きているというか、そんな思いを私は感じています。

戦後は長い間、組織的な提携が再開されたわけでもないのですが、どこかで不思議に繋がってきました。昭和21年、王仁三郎のもとを訪れた道院の信徒に、王仁三郎は「早く大陸の道院本部と連絡をとり、すぐに台湾に拠点をつくれ」と指示しました。その後、昭和24年の中華人民共和国の成立とともに、宗教活動は禁止され、道院は香港や台湾に拠点を移すことになります。提携というか、不思議な関係が断続しながら続いているし、今後もそうやってゆくような予感を抱かせる提携関係ですね。

「宗教」を超えて

先ほどは王仁三郎の言語観にふれましたが、『霊界物語』で描かれた「人類愛善」「万教同根」の世界は、昭和3年3月3日、王仁三郎が満56歳7ヵ月のときに行ったみろく下生大祭のころから開かれていったと、私は考えています。

神がいよいよ下生して、実地に世直しを始めるとのみろく大祭の趣旨であり、権力側もなにか不気味なものを感じたのでしょう。国体変革を目的とした結社を組織したとして、第二次事件での弾圧理由としました。

しかし、王仁三郎がめざした世直しは、かなり根っこの深いものでしたし、神話的表象も駆使し、パフォーマンスも織り交ぜての活動であったと思います。

ひとつ王仁三郎の書いたものを引いてみます。

わたしはかつて、芸術は宗教の母なりといったことがある。しかしその芸術というのは、今日の社会に行なわれるごときものをいったのではない。造花の偉大なる力によって造ら

れたる、天地間の森羅万象を含む神の大芸術をいうのである。わたしは子たる宗教を育てんがために、永年微力をつくしたが、子はどうやら育ちあがったらしいので、この方面は子に譲り、昭和三年三月三日から、親たる芸術を育てんと努力しつつあるのである。明光社を設けて、歌道を奨励し、大衆芸術たる冠句を高調し、絵を描き文字を書き、楽焼をなし、時に高座に上って浄瑠璃を語り、盆踊の音頭をさえも自らとっておるのである。神の真の芸術を斯土の上に樹立することが、わたしの大いなる仕事の一つである¹⁸⁾。

昭和3年3月前後から、王仁三郎は芸術活動、農業活動などを率先して信徒に浸透させてゆきます。植芝盛平の武術も、霊界物語12巻で描かれる三女神の活動といえますが、そのような活動が、狭い意味での宗教の枠をこえて、諸宗教をつなぐ世界を開く営みとなっていったのではと思います。

私は岡田茂吉¹⁹⁾に関心を寄せています。彼は昭和9年に大本を出て、のちに世界救世教の教祖となるのですが、その活動内容は、王仁三郎が昭和3年以降に開いていった超宗教的世界に通じるものがあると思うからです。芸術活動、農業活動、心身健康にかかわる活動など、王仁三郎に薫陶を受け、愛された岡田だから展開できたのではと思っています。

愛善苑の活動も、当初は世界に開かれた豊かさがあつたと思うのですが、次第に自閉的になってゆく傾向がありました。王仁三郎が思いをこめて付けた愛善苑の名称も、「大本愛善苑」、さらに三代教主就任の昭和27年からは「大本」になってゆきます。名称が変わっただけとはいえ、組織体質の変化があつたのではと思いますし、宗教提携の展開や、この後清水巖三郎さんがお話しになる平和運動のあり方にも、影響があつたのではと思っています。

いろいろありますが、戦後大本が取り組んだ世界連邦運動について、戦後大本の平和運動にも関係しますので、少し触れておきます。世界連邦運動は第二次世界大戦が長崎・広島原爆投下で終わった直後、世界的な動きのなかで出発します。日本では賀川豊彦²⁰⁾などがリードし、その賀川やその弟子が綾部にも来て、大本のすぐ側にあるプロテスタントの教会で、昭和24年に世界連邦の話が行われます。王仁三郎の妻・大本二代教主である出口澄がその報告をうけ、「神さんのおしぐみじゃ」と教団活動として取り組むことにはなるのですが、「政治運動やないか」「宗教団体ではそんなことはできない」などなど教団内での異論も吹き出て、結局世界連邦への取り組みは、教団としてはしない、しかし二代教主が言われるからとの消極的な姿勢から、休止していた人類愛善会を昭和24年12月8日に戦後はじめて再発足させることにしたという経緯がありました²¹⁾。

王仁三郎には、戦後新発足の愛善苑は、大正14年の人類愛善会の復活、再活動だとの思いが強かったようですが、王仁三郎没後のこのときは、宗教法人となった教団では世界連邦運動は取り上げられない……との認識に変わっていたようです。

大本と人類愛善会

時代の動きだったのかもしれませんが、昭和 25 年朝鮮戦争がはじまり、自衛の軍隊も再編されはじめ、景気も回復しはじめると、国民の意識も変わってゆきますし、宗教者の意識も変化していった感じですね。戦後の宗教提携に参じた宗教者たちの意識も、昭和 25 年の朝鮮戦争以来、どんどん変わって行ったのではないのでしょうか。概して、大きな流れとして危機意識がなくなることによって、宗教提携も、平和運動も、世界連邦運動などもそうかと思いますが、真剣みがなくなり、そこで抱えていかなければならない運動の課題というのが薄れてゆきがちではなかったのでしょうか。

昭和 24 年、25 年となると、世界連邦運動も教団の課題ではなく、外郭団体的に再出発させた人類愛善会に割り当ててゆく。これは王仁三郎が愛善苑を新発足させたときの思いとは、まったく違うものではないかと、私は思います。

愛善苑というのが人類愛善会そのものだったわけです。人類愛善会は大正 14 年に創立されますが、王仁三郎が明治期から積み上げてきた歩みの集大成的な組織体でした。詳しく説明する時間はないですが、大正 14 年に創立したそれを、昭和 20 年の新発足したとき「これからは愛善苑で行け」と王仁三郎は指示したと思うのです。

吉永進一：ちょっと質問いいですか。人類愛善会と大本の関係を簡単に説明いただけますか。

出口：そうですね。大本の歴史の中から生まれた結実が人類愛善会であり愛善苑だと、私は思っています。

吉永：組織的には、宗教法人は大本愛善苑なんですか、この時期は。

出口：昭和 22 年 1 月に愛善苑は宗教法人になります。人類愛善会再発足の昭和 24 年 12 月段階では、教団名は大本愛善苑となっています。2ヶ月前の 10 月、愛善苑から大本愛善苑に教団名が変更されていますね。

吉永：それで、人類愛善会というのは、宗教法人大本愛善苑とどういう関係にあるんですか。

出口：戦後、王仁三郎が宇知磨さんに、昭和 20 年 12 月 8 日の事件解決奉告祭の前の段階で、王仁三郎聖師は大本ではなくて、愛善苑という名前でやってほしい、やっていくんだと指示をしているんです。

吉永：それが、愛善苑が大本愛善苑になってという歴史があって、それと別に、人類愛善会が再発足する。それは宗教法人大本と別にある組織ということですか。

清水：外郭団体ですね。

吉永：トップは、教主さんになるんですか。

出口：二代教主がトップです。

梶：総裁ということばを使っていたと思います。

出口：人類愛善会総裁ですね。会長に出口伊佐男（=宇知磨）です。

吉永：人類愛善会が、宗教提携とか、平和運動の実質的な実行団体ということになったんですか。

出口：だんだんっていきますね。分担してゆくというか。大本教団と人類愛善会の動きは別だという事になる。教団は教団で教主を中心とし、教えや組織を守って…という、旧来の教団運営となり、人類愛善会は、対外的な外郭団体という、二頭立てみたいになりますね。

世界連邦運動にも問題はありますが、世界を平和に……との取り組みは信仰的にも重要なテーマですが、それを外枠の方に置き、教団がやることではないということになると、大本はカッコつきの「宗教」に戻ってしまうのではないのでしょうか。王仁三郎は「人類愛善」「万教同根」と、いわば超宗教的方向へと開いていったと思うのですが、そうでなくなってゆくような恐れがあるのですね。

つぎに人類愛善会が生まれた大正14年時点のことを、すこし振り返ってみます。大正13年、王仁三郎は内蒙古に入ります。大正13年までに『靈界物語』を大体書き上げていますが、その段階で蒙古に向かい、さらにエルサレムまで行こうとの計画でした。

そのエルサレム入りの予告編のようなものも、『靈界物語』のなかで書いています²²⁾。救世主（王仁三郎）の先駆者として、ブラバースという宣伝使（布教使）がエルサレムに入り、最初にバハイ教の聖者と出会い、ひきつづきキリスト教の再臨信仰コロニーに宿を取り……と話が始まってゆきます。当時話題になった柳原白蓮をモデルにした女性が登場したり、聖地案内はまことにリアルだったり、なかなか興味深いものです。

70巻ぐらいまで『靈界物語』を口述したあと、大正13年2月に蒙古に向かいますが、軍閥の争いに巻き込まれ、銃殺刑寸前にまでなり、どうにか免れ同年7月に帰国します。

さきほど王仁三郎の言語観というところでも触れましたが、『靈界物語』は全巻、「ある」「べし」の世界に自閉する宗教教団、社会組織、人間の思考への批判です。エルサレムをめざしたのも、そこが宗教的背景からくる紛争混乱の地であったからでした。問題大ありの宗教を、人類愛善、万教同根的な超宗教的場にかに導くか、そのような問題意識が王仁三郎にはあったと思います。

エルサレム行きは頓挫したのですが、その思いを入蒙という歴史実績に刻み、帰国後北京で世界宗教連合会をプロモートすることになります。この世界宗教連合会は開催されますが、問題が残されたようで、当時を知る大国美都雄²³⁾が後に語っています。昭和50年代、大本でキリスト教との合同礼拝や、他宗教との交流がおこなわれていました。学術的な検討をと、教内でシンポジウムが開催されますが、そこで大国が語っている記録があります²⁴⁾。

入蒙後の大正14年5月22日、王仁三郎の指示で北京で世界宗教連合会が開催されますが、参加団体の宗教エゴイズムがネックになり、うまくゆかない。そこで王仁三郎は宗教者を集め

て動かすのではなく、宗教を超えたというのでしょうか、人類愛善会をつくれと指示し、大正14年6月9日に人類愛善会を発足させています。

大正14年には、亀岡に大祥殿という建物が出来ませんが、そこに「大本大道場」という看板が掛けられたのを、大国は訝しく思い、「なんで、大道場なんていう武道か何かをやるような名前を付けられたんですか」と王仁三郎に聞くと、「いや、これは各宗教が集まって、お互いが教義の研鑽しあう武道の道場のような、各宗教の修行の場だ。そういう意味において、大道場ということにして、天恩郷をこれから、ひとつの宗教の大道場にせよ」という王仁三郎の言葉であったとのこと²⁵⁾。

「宗教不要の理想へ」という入蒙直前の論文には、「宗教はみろくの世になれば無用のものであって、宗教が世界から全廃される時が来なければ駄目なのである。主義精神が第一であって、大本であろうと何であろうと、名は少しも必要ではないのである。今までより広い大きな考えで世を導く精神にならねばならぬ。大本は大本の大本でもなく、また世界の大本でもなく、神様の大本、三千世界の大本であることを取り違ひしてはならない。」²⁶⁾ などとあり、王仁三郎の思いをかなりはっきりと伺うことができます。

以上簡単に触れましたが、大正10年からの『霊界物語』口述、大正13年エルサレムをめざした入蒙、そして人類愛善会の発足などに、王仁三郎の宗教教団について、また宗教の提携のあり方についても、その思いを伺うことができるのではと思います。

戦後の大本再発足のときに、大正14年の人類愛善会に込めた思いを持ちこみ、教団名も愛善苑という名称となったわけですが、ついてきた弟子たちは、そこまでの理解があったのかどうかということなのですね。

宗教のつなぎ方は、各宗教が本来根ざす「万教同根」の場にあるのではと思います。

道院との関係

梶：今までのお話のところで、王仁三郎の宗教思想ということについて、かなり強い思いをお持ちという事で、独自のお考えがあるということはよくわかりました。今のお話をかいつまんで言っているかどうかは分からないのですが、出口王仁三郎の宗教思想を表面というか、字面というか、それだけではなくて、より深く理解した上で、実際の運動、宗教提携も含まれていると思うのですけれども、深みのあるものとして捉えることができるというようなお話だったかと思います。しかし、戦後においては、朝鮮戦争や、あるいは再軍備であるとか、日米安保であるとか、そういった大きな流れの中で、宗教提携という活動においても、活動全体が表層的になっていったんだというお話だったかと思います。

では、その評価、戦後の宗教提携が表層的なものになっていったという状況の中で、モデル

ケースとして面白いと思うのが、戦前戦後ともに提携がある道院です。大本における宗教提携、宗教間協議とってよいかと思いますが、まず頭に思い浮かぶのが、道院、またはその外核団体としての紅卍字会というものがあると思います。戦前、戦後という形で交流があるわけですが、では、戦前と戦後では、その理念と実践では、どういうレベルにおいて、違いや共通点があるのでしょうか。というのも、戦後の宗教を取り囲む社会的文化的背景というものが、戦前と戦後では異なります。ですから、一口に宗教提携といっても、方針や実践に大きな違いが出てくるのが予想されます。しかし、時代に左右される一方で、戦前と戦後において、変わらず一貫して行われていることも、もしかしたらあるのかもしれませんが。こういうことを確認するのは、いわゆる宗教間協力研究というものの中だけではなくて、広く、宗教史を再考するためのモデルケースになるのではないかと、私個人は考えております。そこで、戦前と戦後の違いという事について、先生ご自身の体験や見解をまじえつつ、道院について教えていただければと思います。

出口：道院・紅卍字会は中国の山東省で生まれますが、出口直大本開祖昇天の大正7年ころには、その霊的な兆しがあったようです。道院・紅卍字会もそうですが、昭和10年の弾圧を受ける直前に提携が成立したベトナムのカオダイ教も、霊的に動きはじめたのは大正10年のころで、大正10年前後は、そんな時代だったのかなと思ったりします。

道院・紅卍字会も、カオダイ教も、どちらも扶乩（フーチ）で神示を受けます。戦前王仁三郎が推進した宗教提携は、既成の世界宗教とかではなく、かなりスピリチュアルで土着的な新宗教という感じですね。

大正14年の『暁の鳥』²⁷⁾などに挿絵(128頁)入りの記事もありますが、世界に神が準備した十二の教団があり、いずれ提携するということを示しています。イメージでもあるでしょうが、道院・紅卍字会やバハイ教、神霊主義の団体などは、実際に提携していたわけですが、提携のありかたにしても、偶然の出会いがキッカケになることが多い。道院・紅卍字会との出会いも、大正12年9月の関東大震災がキッカケですが、異次元からの不思議な経緯がありそうです。

大正11年のはじめに、王仁三郎は『靈界物語』第6巻で「五大教」という章を書いています。この五大教は、その一年ほど後、大正12年に提携する道院・紅卍字会を彷彿とさせる内容になっています。道院は「五教同源」として仏教、キリスト教、イスラム、道教、儒教などの五大宗教の教祖を拝し、カオダイ教も孔子、老子、釈迦、観音菩薩、キリスト、ムハンマド、李白、ソクラテス、トルストイ、ヴィクトル・ユーゴーなどを、同じ根っこにある聖者として拝しています。王仁三郎も神儒仏耶同根で、釈迦、孔子、キリスト、マホメットなどを高級神霊の働きとみる神話に立ちます。

戦前に王仁三郎が提携する宗教や神霊主義団体は、いわば王仁三郎にしかできないというか、

宗教のつなぎ方（出口・清水）

なんか不思議な宗教提携なのですが、提携する相手の根ざすところ、その世界観、神観などに、友好的にコミットし、交流するというパターンは学ぶところかなと思いますし、戦後行われた宗教会議などの提携とは質が異なるのでは……とも思われます。

道院・紅卍字会とのつきあいは、戦前は密接なものでした。神秘的な話も数多くあります。満州事変や「満州国」、日本の大陸進出、敗退など、深く関わり、その史実はもっともっと調べてゆかなければならない課題だと思います。道院・紅卍字会との提携は、過去のものではなく、これからさらに出てくるのではと思われまますし、王仁三郎が志向した宗教提携がさらに研鑽されなくてはと思っています。

カオダイ教・バハイ教との関係

私はベトナムのカオダイ教には20年ほど前、1回目は組織代表として、2回目は友人たちとの参拝団で行きました。共産党支配の国で、行動の制約はありましたが、本部聖堂での祭典にも参列し、地方教会を訪問し、儀礼的とはいえ、楽しい体験でした。短期間の滞在ですし、言葉の壁もあります。信仰内容ももっと知りたいとおもいつつ、手がかりとなる人間関係というか、カオダイの友人ができなかったことが、残念でした。今はネット社会ですので、これから新たな提携は可能かなと思っています。

吉永：三平さん、その時、道院だと、儀式を交換するっていうか、お互いの儀式で出しあうってことをやるじゃないですか。カオダイはそういうのはやらなかったんですか。

出口：私の場合は、当方の自由な礼拝形式での祈りだけでした。カオダイの祭典や祈りには、敬虔な思いで同席させてもらおうという感じです。歓迎されたようで、体の寸法をとり、早速にカオダイの服をつくってもらい、嬉しかったですね。しかし、まだなにも恩返しできていないような思いで、カオダイへの思いは今も続きますね。

吉永：道院の場合は、例えば道院のやり方で、王仁三郎の霊が降りてくるとか、やりますよね。その時、大本の儀礼でやるっていうのはないんですか。

出口：友人の紹介で、国内でのフーチ壇に2回参拝させてもらったことがあります。その時などは、フーチを拝受するだけです。個人的参拝ですから、大本の儀礼などはしません。

大本と道院の関係は深いものがあり、自ずと道院に関係する友人たちも多くなっています。いろいろ派閥もあり、問題も多いようですが、そうなる歴史もありますね。

道院・紅卍字会は、中華人民共和国成立後、大陸を追われ、香港、台湾に拠点を移しますね。どこが主導するかの問題もあったでしょう。アメリカとか、日本の財界、右翼の人たちとかとの繋がりを持つ人も多いようですね。日本の道院のトップだった笹川良一は、この人は戦前から大本に繋がりがありますが、道院・紅卍字会を場に、いろいろ人脈関係づくり、自然と右翼

的スタンスにもなったのかなと思ったりしますが、よくわかりません。宇知磨さんは割り切って交流をしていたと思いますが、出口栄二はそのような右翼系の人たちとは肌が合わないようでした。道院との交流はどうだったのでしょうか。

私的には、多摩道院を主幹していた晩年の笹目恒雄²⁸⁾とは、不思議な出会いとつきあいでした。不思議な繋がりもあるものだと思います。

大本と道院・紅卍字会、また、カオダイとも、時代の波はあっても、切れることはないかと思えますし、そのためにも、王仁三郎流の人類愛善・万教同根をと思えます。バハイなどもそう思えますね。

吉永：そのバハイは、戦後は誰が行かれたんですか。

出口：提携の意図をもってバハイに行った人はいないです。

吉永：戦前もバハイが日本に来たと思うんですけど、戦前も提携があったのですよね。

出口：大正 11 年に、二代教主が伊豆を旅行しているときに、汽車の中で偶然会ったのがキツカケで、交流が始まったとか。

吉永：そういう話を書いてあるんですけど、まあ本当かどうか（笑）。

出口：本当にしときましましょう（笑）。バハイ教のことは、『霊界物語』64 卷上巻でも取り上げられています。道院・紅卍字会とどのような密接な提携関係は記録にはないですね。

吉永：バハイと戦前やって、戦後、むこうから来たことはあるけど、こっちから行ったっていうことはないですか。

出口：ないですね。バハイの人が来たとかいうことは聞いたことがないですね。

吉永：昭和 30 年に綾部の世界宗教会議に……。

出口：あ、そういうところで来ているんですかね。来ているかもしれないですね²⁹⁾。

吉永：で、戦後、昭和 32 年になると、出口栄二が欧米宣教へということになるのですよね。それで、ハイファでバハイ教に行つたと。紅卍字会、ハイファのバハイ教、それからコペンハーゲンのマルチヌス学会……。

出口：そうですね、マルチヌス学会は行ってます。マルティヌス（1890～1981）と言う人の宗教思想を紹介している団体らしい。心靈主義的な思想もありそうです。教団役員でエスペランチストの伊藤栄蔵も昭和 34 年に訪問していますね³⁰⁾。

吉永：それと最後に、イギリスの精神主義、これはスピリチュアリズムですよ。ブラジルに講演に行ったようですが、ブラジルの、大本教信者のところをまわられたのか、それとも他に……

出口：そのころブラジルはもう信者が待ってたんですよ³¹⁾。それからエルサレム云々がはじまってと。

吉永：こういう風に行つたときに、なんかこう、むこうの教団と提携するという事は。

出口：どうでしょう。お詣りしたり，交流したり。

永岡崇：平たく言うと仲良くなるっていう感じですかね，提携っていうよりも。

出口：仲良くなるっていうか，人間関係をつくるというか……。

吉永：なんか教団内部では，こういうとこへ行ってこういう人に会ったとかいう伝説みたいなものはないですか。

出口：栄二，広瀬静水の紀行文が大本の機関紙に掲載されています³²⁾。

吉永：主な提携先っていうのは，道院とカオダイっていうのが……

出口：カオダイも提携っていう形ではないですね。交流はしていますけど。道院が一番ですね。

王仁三郎が蒔いた宗教提携は，これからのことかもしれない。

それにしても，大本教団史では，いろいろな宗教教団が，初発の神諭の「天理・金光・黒住・妙霊先走り」から，次々にてできます。稲荷講社，皇典講究所に建勲神社，伏見の御嶽教，仏教も古くからのかわりですし，王仁三郎は仏典も読み，バイブルには触れ，キリスト教の友人もある。他宗教とのつながりは王仁三郎の中では色々な様相であったと思います。

梶：ここ最近の大本教団の本部についていいますと，道院に関する資料はわりと揃っています。

出口紅さん³³⁾が台湾に行ったりだとか。あのレベルだと，確かに宗教提携というレベルなのかなと思います。確かに今日お話にあったバハイだとか，カオダイとかいうのに関しての具体的な提携っていうのは，なんかよくわからないなっていう感じですかね。宗教提携っていうものの範囲ですよ。その問題が今浮上したんじゃないかと思います。ありがとございました。宗教提携に関するお話を，戦後を中心として，出口先生にお話をいただきました。次に，今日のテーマのもうひとつであります，大本における平和運動について，清水巖三郎先生にお話したいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

王仁三郎の平和思想

清水巖三郎：出口三平さんが提出されている資料・「戦後大本 平和運動関連年譜メモ」を見ますと，昭和20年の12月8日に大本事件解決奉告祭が行われ，大本は愛善苑として新発足することになります。年譜のその次の欄を見ていただきますと，昭和20年の12月30日に，出口王仁三郎の「吉岡発言」があり，今日その全文を持ってきました³⁴⁾。「予言的中，火の雨が降るぞよ」の大見出しです。朝日新聞の「鳥取発」となっています。この時王仁三郎は鳥取の吉岡温泉に滞在中でした。「大本教祖出口王仁三郎氏は七十五才の衰へもみせず，獄中生活でかかった軽い神経痛の保養のため，いま鳥取市外吉岡温泉で静養している」とリードがついています。大阪本社から鳥取支局に王仁三郎を取材するようにとの指示があったようです。その時の記事が，王仁三郎が亡くなる前の，最後の対社会的な発言となるのです。大事な文章で

すので、紹介させてください。

自分は支那事変から第二次世界大戦の終るまで囚はれの身となり、綾部の本部をはじめ全国四千にのぼった教会を全部叩きこわされてしまった。しかし信徒は教義を信じつづけて来たので、すでに大本教は再建せずして再建されてゐる。ただこれまでのやうな大きな教会はどこにも建てない考へだ。

大本教団は、昭和10年の大弾圧によって破壊され、戦時中はなにもできない状態でした。他の宗教は、当時の時代の流れの中で戦争協力的なことをせざるを得ない時代でしたし、教えを曲げたところもあったわけです。戦後、多くの教団が平和運動に取り組みますが、どこかに後ろめたさや懺悔の思いがあったのではないのでしょうか。ところが大本教団は、弾圧によって囚われの境遇となり、弾圧はされたが教えは曲げなかったという誇りが残った。治安維持法違反も無罪となったし、不敬罪も「実につまらぬこと」だったと王仁三郎はここで語っています。

治安維持法違反は無罪となったが、執行猶予となった不敬罪は実につまらぬことで「御光は昔も今も変わらぬが、大内山にかかる黒雲」といふ浜口内閣時代の暴政をうたったものを持出し、“これはお前が天皇になるつもりで信者を煽動した不敬の歌だ”といひ出し、黒雲とは浜口内閣のことだといったが、どうしても通らなかった。

さらに、

自分はただ全宇宙の統一和平を願うばかりだ。日本の今日あることはすでに幾回も予言したが、そのため弾圧をうけた。“火の雨が降るぞよ、火の雨が降るぞよ”のお告げも実際となって日本は敗れた。これからは神道の考へ方が変わってくるだらう。国教としての神道がやかましくいはれているが、これは今までの解釈が間違つてゐたもので、民主主義でも神に変わりがあるわけではない。ただほんたうの存在を忘れ、自分に都合のよい神社を偶像化してこれを国民に無理に崇拜させたことが、日本を誤らせた。殊に日本の官国幣社が神様でなく、唯の人間を祀つてゐることが間違ひの根本だった。しかし大和民族は絶対に亡びるものでない。日本敗戦の苦しみはこれからで、年毎に困難が加はり、寅年の昭和二十五年までは駄目だ。いま日本は軍備はすっかりなくなったが、これは世界平和の先駆者として尊い使命が含まれてゐる。本当の世界平和は全世界の軍備が撤廃した時にはじめて実現され、いまその時代が近づきつつある。

宗教のつなぎ方（出口・清水）

東京大空襲をはじめ、各地の大空襲、さらに広島、長崎の原爆など、「火の雨」は実現してしまった。そして大事なことは、国教、神道の問題ですね。簡単にいえば国家神道が問題だった。「民主主義でも神に変わりがあるわけではない、ただ本当の存在を忘れ、自分の都合の良い神社を偶像化して、これを国民に無理に崇拜させたことが、日本を誤ませた」と。要するに、ただの人間を神にしていた、ここが間違いの根本だったというのですね。

戦後は食糧難なども大変でした。「年毎に困難が加はり、寅年の昭和 25 年までは駄目だ」というのですが、昭和 25 年は朝鮮戦争で曲がり角にもなってゆきます。愛善苑は、その昭和 25 年から世界連邦運動など始めていますが、「いま日本は軍備はすつかりなくなつたが、これは世界平和の先駆者として尊い使命が含まれている、本当の世界平和は全世界の軍備が撤廃したときにはじめて実現され、いまその時代が近づきつゝある」との発言は、その後の日本への預言的警告ではなかったかと思います。こういう内容が「吉岡発言」でした。

王仁三郎の発言は現実離れしているように思われますが、その後の日本の動きを見てみると、現在の政権が、北朝鮮問題や、尖閣諸島問題、竹島問題などなどをとりあげては、安保法制を進め、平和憲法も変えてゆきそうな動きですね。軍備撤廃どころか軍備強化路線となっている。王仁三郎は逆で、「世界平和は軍備が撤廃されたときにはじめて実現される」という。20 年 12 月にこの発言があり、その 2 年少し後、昭和 23 年 1 月 19 日に王仁三郎は昇天しますが、大事なメッセージだったと思います。

出口栄二への批判

さて、出口栄二さんが昭和 37 年にモスクワに行き、「全般的軍縮と平和のための世界大会」に出席します³⁵⁾。その帰路、中国の仏教協会の招請を受けて、7 月 19 日に中国を訪問し、二週間にわたって滞在して、8 月 1 日に帰国しますが、「人民日報」に掲載された周総理と懇談する出口会長の写真があります³⁶⁾。

この写真も教団の中では、出口栄二批判の種になりました。先ほど教団と人類愛善会はどういう関係なのかという質問がありましたが、人類愛善会は外郭団体だということで中心軸から外してゆくような、そんな考え方を持つ人たちが多くなってゆきました。

平和運動への取り組み

私が直接平和運動に関わり出したのは、昭和 35 年ころでした。1960 年の「60 年安保」で、激しく日本中が動いていたころです。私は昭和 35 年に鳥根の高校を卒業し、京都へ出てきましたが、当時人類愛善会で取り組んでいた憲法擁護・軍備全廃の署名活動³⁷⁾に参加し活動を始

めました。昭和36年の春から10月末までに748万の署名が集まりました³⁸⁾。

そのころ私が直接タッチしたのが、昭和36年7月25日から開催された「世界宗教者平和会議」でした。岡崎の京都会館で行われ、大本・人類愛善会は主催者の重要なメンバーでした。会議では、当然ですが、教義や信条の優劣とかではなく、世界平和実現のために、各宗教者が具体的にどう活動するかというテーマで取り組まれます。16か国、47名の海外からの代表者の参加もあり、3日間にわたり意見が交わされ、17項目にわたる「京都宣言」が行われました³⁹⁾。この「世界宗教者平和会議」では、私は人類愛善会の中の学生の身分であったので、割と出やすく、受付などをさせてもらいました。

当時は、左京区にある大本松ヶ崎支部に出入りしていました。分苑長は、太平洋戦争末期、玉砕した硫黄島の、わずかな生き残り兵であった児島一統という方でした。児島さんは個性豊かで、魅力的な方でした。その松ヶ崎支部には、京大、立命館、同志社など、地方大本信徒の二世になる学生が結構集まっていました。「世界宗教者平和会議」でも雑役係で皆が関わっていました。みな多感なところで、支部での議論も盛んでした。

今回、大谷栄一先生がまとめられている「京都における宗教者平和運動の展開」⁴⁰⁾を読ませてもらいましたが、「ああ、懐かしいなあ」という人が沢山出てきます。そこで細井友晋さんの略歴⁴¹⁾が紹介されていましたが、北野神社の近くに、日蓮宗の本山の一つである立本寺があり、細井さんはその貫主でした。京都宗教者平和協議会の事務局が細井さんのもとにおかれ、私はその事務局員でもありました。立本寺で会議が開かれると、同志社とか立命とか、若い宗教学者もいましたし、市川白玄さん⁴²⁾なども居られ、最初はそれがものすごく勉強になりました。

事務局員の私は、協議会は財政難で、活動資金の調達にも関わりました。当時の理事長は、大本の出口新衛⁴³⁾という方でした。はっきり言うと理事長が自分のポケットマネーまで出して、活動を支えようとしていたのです。そのようなことではあかんと、細井友晋さんはじめ、みなそれぞれに、心を痛めていました。

京都宗教者平和協議会は会員制で、会長は清水寺の大西良慶さんでした。そんなことから何回か成就院の良慶さんの所にも、教学部長の福岡精道さんとともに友晋さんが出かけていました。活動面の話の方はうまくまとまるけれど、会費はなかなか集まらないので、事務局は大変だったのです。兵糧攻めですよ（笑）。

亀岡に住んでいた出口新衛さんが、「清水君、このバイクで集金にまわってくれんかね」と、お家の50ccバイクを出され、私は国道9号線の老ノ坂のトンネルを、当時ですから、ヘルメットもかぶらずに京都へと向かいましたね。鳴滝の三宝寺からズーツと集金にまわりました。行くと、「どちらさんですか」って、「京都宗教者平和協議会です。会費集めに来ました」というと、「御苦労さまです」と、素直に渡してくれるのです。それが、僕の役目だったんです。

学生時代だからできた事であって、まあ、交通事故もおこさずに、最後老ノ坂を越えて亀岡の新衛さん宅にバイクを返しに行きました。それほど実際は、事務局は金銭的にもしんどかったですね。

細井さんはよく資料を準備し残されました。奥さんも、娘さんもおられましたが、「今日も長いこと会議されますね」と言ってね、なんか気の毒な気がしました。会場費や事務局の場所代も無料だし、友晋さんがそのお寺の貫主だったからできたと思います。

平和運動への逆風

そういう中で、結局人類愛善会も——この宗教者平和協議会の時は人類愛善会ですが——出口新衛が理事長ではあっても、教団からはだんだん参加する人が減ってゆくのですね。なぜそんな動きになるかという、先ほど三平さんからも話が出ていましたが、王仁三郎の吉岡発言をはじめ、戦後は愛善苑で出発し、人類愛善会と大本は一体だったのが、だんだん分離しはじめてゆく感じでした。教団の総長でもあった出口栄二の思想に、肌が合わない、反対の人もいたのですね。

それともう一つ私が関わったことですが、原水爆禁止世界大会に先立って、核戦争阻止だと、原水爆禁止ということで「平和行進」をおこなっていました。私も広島・長崎の平和行脚を行い、被爆者救援の署名活動にも参加しました。

ところが、『大本七十年史』にも書かれていますが、「第8回の原水爆禁止世界大会は、8月1日から6日まで東京で行われたが、強引な主導権いが表面化し」⁴⁴⁾云々と、この辺からちょっとおかしくなるんです。そして、どういう風になるのかという、「この時期には、平和運動の内部における、主導権争いをめぐっての政党色が益々濃厚となり、平和を志向する団体の動き自体にも、不幸な分裂の危機が強まりつつあった」⁴⁵⁾と。

私がこれを如実に感じたのは、3・1、久保山愛吉さんの第五福竜丸の墓前祭での体験が最初でした。大学を卒業し、峰山高等学校に勤めていたころです。3月は卒業シーズンでしたが、私はクラス担任ではなかったので時間の都合ができ、組合から行く人は動員で行くのですが、私はひとりの宗教者という思いで、ポケットマネーで行きました。久保山さんのお墓のある焼津の弘徳院へ行くと、ここでは歌も歌いました。実際に歌ってみます。

「俺達の仲間が一ひとり 灰をかぶって死んだ 灰をかぶったその日 海の幸とったその日 三月一日」⁴⁶⁾、こういう歌を、焼津の墓前祭の前で歌い、日本山妙法寺の僧侶達は「南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経」と団扇太鼓で祈っていましたが、その場で、はっきり言うと社会党系と共産党系の分裂が表面化していましたね。久保山さんの奥さんがね、「もうやめてください」って言うんですよ。宗教者として私たちがやっていることも、そんな分裂のなかで見られ

たり、レッテルを貼られるのも嫌になっていましたね。

梶：さきほど先生がおっしゃっていた、主導権争いというのは、原水爆禁止運動を進めている団体の分裂という事ですね。

清水：そうです。原水協と原水禁です。簡単にいうと。共産党系と社会党系です。

梶：原水爆禁止日本国民会議が分裂していった。ここではこれを主導権争いが表面化した、という風に表現しているんですよ。

大谷栄一：3・1の慰霊祭の時に焼津に調査にいったことがあるんですけど、今も日本宗教者平和協議会と、日本山妙法寺が先頭に立って行進をするんですね。今の日本宗教者平和協議会は、基本的には共産党系なんですね。来ている人たちも共産党関係の労働組合とか団体がほとんどでやっています。ですから、まだ先生がおっしゃっていた政党間の分裂が尾を引いていると、そういう状況があります。ですから、1950年代、朝鮮戦争後が特に顕著ですかね、共産党と社会党の平和運動の分裂ですね、それが宗教間にもちこまれて、宗教者の間にも影響が生じたというような構図になるかと思います。

永岡：当時の対立の一つの焦点となるのは、ソ連の核実験をどう評価するかという問題だと思うのですが、大本としては、あらゆる国の核実験に反対という立場、社会党・総評系に近いということでしょうか。

清水：そうですね。ただね、細井友晋さんはね、どっちかっていうと共産党系でしたね、京都宗教者平和協議会は。

1962年のことですが、『おほもと』という教団の月刊雑誌があり、そこに三代教主の「私のねがい」というのが掲載されます⁴⁷⁾。これがすごく当時の私達にとってはショックでした。

私のねがいといたしますところは、あらためて、神さまのみ教えを、ほんとうに、うけとらせていただき、示されているお道をしっかりと歩ましていただくことで、神さまのみ教えによる大本の教えを、いま一度、いただき直してもらいたいことであります。

というところからはじまり、

大本の教えは、右によらず、左によらず、右をも左をも平和の大道に活かしようのものでなければなりません。この中の人から平和な気持ちになって、それを世の中につつしていけと示されているところです。『みろくの世をつくる』という言葉を、よく聞かされますが、それは、どこにつくるのでしょうか。私は思います。自分の心の中に、人の心の中にみろくの世がつかれなくて、どうして「神さまがお示しになっているみろくの世」がつかれるでしょう。

とこういうような事が書かれ、それまでの私達の運動に教団内からブレーキがかかるわけです。すなわち、自分自身の心の中に平和をつくり、さすがといわれるような人格でなくては、世界の平和とか言っても、本当の歩みにならない云々、との論ですね。まず己の心の中の平和をつくれ、「外なる平和」は、それとの兼ね合いで実現すると。

関わっていた宗教者平和協議会というのも、どんどん尻すぼみになってゆく感じがしていました。職場もいそがしくなってくるし、私は矛盾を抱えた活動から離れてゆきます。

宗平協の機関誌『宗教と平和』に、割り切れないままに、路線変更した大本を批判するようなことを書いたこともありました。学生時代から私を指導していた児島一統さんが、「さびしいこと書いとるなあ」って言うてくれました。

それを書いたころは、大本信仰もしながらですが、私は宮津の日蓮宗のお寺に下宿していました。そのお寺の住職とは、被爆者救援の平和行脚で知り合ったのです。お寺では毎朝5時ぐらいに起こされ、私もお経をあげていました。住職は荒行をしていたんですけど、私はすることはありませんでした。

あのころは、今思うと、試されていたというか、脱皮のための過程だった感じです。父が熱心な大本信徒でしたし、私も祝詞が普通ですが、宮津の日蓮宗の下宿先では「南無妙法蓮華經」も唱えていました。しかし、私の心の中では神仏の違和感なしで、割と気持ちは一致していました。

私はある意味で貴重な学生生活が送れましたし、大本に入っていたがために宗教者平和協議会の細井友晋さんと知りあうことができ、日蓮宗とも親しみ、他に沢山の出会いもあり、楽しかったですね。

梶：ありがとうございます。清水先生には、戦後の平和運動に参加されていたということで、ご自身の体験、それからその中でどのような事を考えながら運動に参加されたかということをお話いただきました。

その中で浮かび上がってきたのは、先ほど大谷先生がお話いただいたように、共産党と社会党との対立という社会的な構造の中に宗教者も巻き込まれていくという、大きな背景、そこに大本が位置づけられるということ。そしてもう一つが、昭和37年に、出口直日が、「私のねがい」という文章を出した際に、教団の組織の中で対立があり、組織自体が再編されていくと。そしてこのとき、これまで組織の前面に出て活躍していた出口栄二さんが、教団が祭教院制度⁴⁸⁾というのを取り入れたがゆえに、後ろにひっこんでいく。そういったような、教団組織内部における、——それは先ほどの社会的背景というものと絡んではくるんですけども——二点の原因があったというようなお話だったと思います。

注

- 1) 王仁三郎の昇天後からの大本教団の内紛事件。1980年から表面化し現在にいたっている。それぞれの立場によって解釈が異なっており、宗教法人大本では「反教団事件」と呼ぶ。
- 2) 出口宇知麿。1903年～1973年。伊佐男，うちまるは同一人。王仁三郎の娘婿。戦後新発足した愛善苑委員長。昭和33年まで大本総長。宗際活動，世界連邦運動などに取り組む。
- 3) 出口栄二。1919年～2006年 王仁三郎の孫娘の婿。1958年から大本総長。平和運動に邁進するが，教団内で足並みそろわず1962年に失脚。
- 4) 出口和明。1930年～2002年。王仁三郎の孫。宇知麿の長男。
- 5) 出口直生誕から昇天までを描く大本草創期の大河小説。全12巻。1969～1971年 毎日新聞社。
- 6) 出口栄二『出口栄二選集』全4巻 講談社 1979年。
- 7) 永岡崇「宗教文化は誰のものか——『大本七十年史』編纂事業をめぐって」『日本研究』第47巻 2013年。
- 8) 栗原彬。1936年～。国際社会学。立教大学名誉教授。
- 9) 出口澄子。1883年～1952年。王仁三郎の妻。
- 10) 大本七十年史編纂会編『大本七十年史』下巻 宗教法人大本 1967年 776～786頁。
- 11) 牧野虎次。1871年～1964年。第11代同志社総長。出口王仁三郎とは明治期から親交があったという。『大本七十年史』下巻 938頁。
- 12) 有賀鉄太郎。1899年～1977年。同志社大学初代神学部長，京都大学文学部長。
- 13) 『大本七十年史』下巻 738頁。
- 14) 『大本七十年史』下巻 741頁。
- 15) 『大本七十年史』下巻 779, 778頁。
- 16) 同上 784～786頁。
- 17) 出口王仁三郎「総説歌」『霊界物語』57巻 5頁。
- 18) 出口王仁三郎「宗教より芸術へ」『月鏡』1930年。
- 19) 岡田茂吉。1882年～1955年。宗教家。1920年に大本へ入信。世界救世教，箱根美術館，救世熱海美術館などを創設。自然農法を広める。
- 20) 賀川豊彦。1888年～1960年。キリスト教社会運動家。海外での活躍も盛んで，ノーベル賞候補となった。著作『死線を越えて』はベストセラーとなっている。
- 21) 『大本七十年史』下巻 880頁。出口栄二「世界連邦運動と人類愛善会再発足」『出口栄二選集』第4巻329頁。
- 22) 前掲『霊界物語』64巻上。大正12年7月口述。
- 23) 大国以都雄とも。戦前においては昭和青年会統務などを歴任。戦後は総務部長，人類愛善会相談役などを務めた。
- 24) 『大本教学』第17号 大本教学研鑽所 1978年 16～18頁。
- 25) 同上。
- 26) 『神の国』大正13年1月号。出口王仁三郎『出口王仁三郎全集』2巻 万有社 1934年 127～132頁。
- 27) 井上留五郎記出口王仁三郎校閲『暁の鳥』天声社 1925年。
- 28) 笹目秀和。1902年～1997年。大正時代から王仁三郎との交流があった。
- 29) 『大本七十年史』下巻 1159頁。D・M・アールという大学教授が参加。
- 30) 『大本七十年史』下巻 1201頁。

宗教のつなぎ方（出口・清水）

- 31) 『大本七十年史』下巻 1196 頁。
- 32) 1977 年 7 月号以降の『おほもと』誌に報告記事がある。
- 33) 宗教法人大本第五代教主。
- 34) 『朝日新聞』1945 年 12 月 30 日 2 面。
- 35) 『大本七十年史』下巻 1298 頁。
- 36) 『大本七十年史』下巻 1297 頁。
- 37) 『大本七十年史』下巻 1170 頁。
- 38) 『大本七十年史』下巻 1170 頁。
- 39) 『大本七十年史』下巻 1117 頁。
- 40) 大谷栄一「1950 年代の京都における宗教者平和運動の展開」『佛教大学社会学部論集』第 54 号 2012 年。
- 41) 同上 3 頁。
- 42) 市川白玄。臨濟宗僧侶，社会活動家。
- 43) 出口新衛。出口五十麿とも。王仁三郎の五女，住之江の夫。
- 44) 『大本七十年史』下巻 1299 頁。
- 45) 同上。
- 46) 作詞 焼津青年合唱団 作曲 泉三吉「三月一日の歌」。
- 47) 『おほもと』1962 年 7 月 8 月合併号，巻頭。
- 48) 教団の意向により，出口栄二の総長退任をはじめとした人事の一新をする組織改革の一環として，出口家の人間は祭祀に徹すべきとして，祭祀を統括する「祭教院」という部門がつけられた。